

(1) ガイダンス

ガイダンスの初めに、総合的な学習の時間の目標、本校の総合的な学習の時間の目標、3年間の目標や流れ、テーマである「住みたいまちプロジェクト～ふるさとの明日を創ろう～」を確認した。2年生が行う地域と関わる探究的な活動は、職場体験学習である。テーマに迫るために、職場体験学習を通して社会と関わることで、地域で働く人の思い、地域を支える職業や機関を知り、島根の現状や課題、良さを見つける活動を行うことを伝えた。また、その活動が3年生の学習につながるように、本校の総合的な学習の時間の6つのカテゴリーである環境、生活、観光、教育、福祉、ものづくりを意識して行うことを確認した。

授業の後半では、島根に関するいくつかの資料を生徒に示した。初めに、人口減少、高齢化等、島根の問題点を表した資料を提示した。図1は「平成27年3月高等学校卒業生の進路（島根県教育庁教育指導課調査 H27.3）」である。生徒は、進学・就職により、毎年55～60%の高校生（約3,500人）が、一度は県外に出て行く状況に驚いていた。そして、この状況を「高卒での就職は難しい」等、現代の社会問題と照らし合わせてとらえたり、「一度は県外に出てみないと島根が良い所なのか悪い所なのか分からない」「島根では自分の学びたい分野が勉強できない」等、自分の将来を想像しながら考えたりしていた。島根の問題点を示す資料を提示した後、島根の良さを伝える資料として「移住者希望地域ランキング（NPO 法人ふるさと回帰支援センター）を提示した（表1）。この資料は、同センターが運営する「ふるさと暮らし情報センター」の来場者、つまり、実際に移住を考えている方を対象に行ったアンケートの結果である。実際に移住を考えている方から島根が注目されていることを知り、生徒は嬉しい気持ちをもつとともに、「なぜ島根が上位にきているのか」「島根に移住したくなる理由は何だろうか」「都会の方が便利なのになぜ島根に移住したいのだろうか」という問いをもった。また、授業の終わりには、今後の総合的な学習の時間に「社会と関わる」ことを通して、個々の問いを基に、課題を解決していこうとする意欲も見られた。

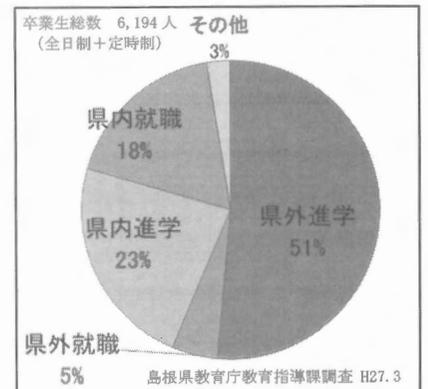


図1 平成27年3月高等学校卒業生の進路

表1 移住者希望地域ランキング

順位	2013年	2014年	2015年
1位	長野	山梨	長野
2位	山梨	長野	山梨
3位	岡山	岡山	島根
4位	福島	福島	静岡
5位	熊本	新潟	岡山
6位	高知	熊本	広島
7位	富山	静岡	高知
8位	群馬	島根	秋田
9位	香川	富山	大分
10位	鹿児島	香川	宮崎

NPO 法人ふるさと回帰支援センター2016

ガイダンスのふりかえりより

○島根は人口減少とか高齢化とかいろいろ問題ばかりあるから、住みたいと思う人が他の県と比べて少ないと思っていたけど、移住者ランキングでは3位に入っていて、びっくりしたし、嬉しかったです。でも、なんで島根が良いのか分かりません。都会の方が暮らしやすいと私は思っているけど、それが間違っているのか疑問です。

その疑問を解決するためにも、島根の魅力をこれからも見つけていきたいと思いました。

- これからやる総合の内容が分りました。私は、自分で課題を見つけてそれに取り組むことができる総合が大好きです。しかも、これから島根のことをやるというのでとてもワクワクしました。私は島根を良い所だと思っているけど、それを具体的に伝えることができません。この勉強が終わったときに、自信をもって島根の魅力を伝えることができる人になりたいです。
- 島根県の人口は減っているけど、移住したい所としてランキングに入っていることは、とても嬉しかったです。島根は、人との関わりが多いことや、自然が多いことなど、たくさんの良い所が私はあると思います。それ以外にも島根の良さはたくさんあると思うので、それを見つけていきたいです。そして、「移住したい人」や「島根から出たいと思っている人」に、島根の良さを伝えていきたいです。
- 今回のガイダンスで、改めて総合のテーマを知ることができました。僕は、松江で医院を開業して地域の人が安心して暮らせるような町にしたいと思っています。そのためにも、今の松江の現状、求められていることなどを知りたいと思いました。それができるのが総合なので楽しみです。

【指導上の留意点や地域と連携する際の留意点】

- ・本校の3年間の総合的な学習の時間の目標や流れに見通しがもてるように、昨年度の活動の写真を使いながら行った。
- ・島根に関する資料の提示では、島根の現状を知るために、できるだけ新しい資料や過去数年分を比較して提示するようにした。
- ・島根に関する資料の提示では、島根の問題点を客観的に示す資料だけでなく、自分の今後とつなげて考えることができるように「平成27年3月高等学校卒業生の進路」の資料を使った。また、「移住者希望地域ランキング」で島根が上位に入っていることを示し、島根の良さとは何かを考えるきっかけになるようにした。

(2) 講演会「未来創造プロジェクト ～自分と地域の明日を創る～」

講師 しまね教育魅力化特命官 岩本悠氏

今後の学習活動に取り組む上で、ふるさとの現状、良さ、課題などに対する自覚と目的意識を高めたいと考え、講演会を行った。学習活動⑥(1)の道德の時間に扱った資料中の、隠岐島前高校の魅力化プロジェクトの一員である岩本悠氏に、未来を創るヒントについて自身の経験を踏まえながら語っていただいた。

前半は、好きなことや得意なことを生かして人や社会に貢献する「自他満足」の生き方や、多様な人々に出会って話を聞いたり新たなことに挑戦したりする「越境」などをキーワードに話が進んだ。途中、生徒にこれからやってみたいことを考えさせたり発表させたりしながらの講演で、生徒は自分の生き方と重ねて話を聞くことができた。

後半はさらに、島根が抱える課題に向き合う時間となった。「私を惹きつけた島根の魅力とは何だろう」という岩本氏からの問いかけに、多くの生徒は「自然が豊か」「人が優

しい」などのプラス面を挙げたが、岩本氏は、「島根は重要課題の宝庫で、課題の先進地であることが魅力」だと話した(図2)。島根で人口減少や少子高齢化、財政難といった課題を解決することができれば、その取組は、高度成長を遂げた社会から持続可能な社会への曳船(タグボード)となる。生徒にとって、島根がどのようなところなのかを新たな視点で考える第一歩となった。



図2 講演会の様子

また最後は、生徒が日常生活で解決したい課題は何かを挙げながら、課題解決とはどういうことかを考える時間となった。「(身の回りの課題として)学校のロッカーが小さい」という生徒の意見に対して、岩本氏は、「決められたスペースに物を収納する力を付けることができるって考えられないかな」と問いかけた。課題を解決しようとする際に、本当にそれが解決すべき課題なのか、なければ買う・増やすといった方法だけで魅力につながるのか等と考える、新たな視点を得ることができた。

講演を通して、生徒は島根の現状、良さ、課題などについてじっくりと考えることができた。また、ふるさとの課題を見つけ解決しようとするのが目標である今後の学習に、大いにつながるものであった。

講演「未来創造プロジェクト ～自分と地域の明日を創る～」のふりかえりより

- 「越境する」という言葉が印象に残りました。自分のまだ知らない世界に行って、様々なことを経験すれば新しいものが見えてくるということを教わり、これからの人生「越境する」ということをたくさんやってみたいなあと思いました。
- 島根は問題だらけだと言われると、責められているようにも思いましたが、だからこそ、できることがあると分かりました。また、自分の知らない世界をどこまで踏み出すことができ、その中から自分の将来を選ぶことができるかどうか、ということの大切さも学びました。
- 島根県は、東京などに比べてないものが多いですが、そのおかげで人との強いつながりなど、都会では感じられないものを感じられるんだと思いました。“本当に良いまち”について、もっと考えていきたいです。

【指導上の留意点や地域と連携する際の留意点】

- ・ふるさと島根の課題に取り組んでいる方の話を聞くことで、今後の学習への意欲を高められるようにする。
- ・話を聞くだけでなく、生徒同士の意見交流を取り入れることで、自分の問題として考えられるようにする。
- ・次時のオリエンテーションにおいて、本時の内容を想起させることで、学習内容につながりをもたせる。

(3) 「住みたいまち」について考える 1

まず、Bridge のテーマ「住みたいまちプロジェクト～ふるさとの明日を創ろう～」を想起できるように、前時のガイダンスのふりかえりを行った。「なぜ島根は人口が減少しているのだろうか」「なぜ島根に移住したいという人が増えているのだろうか」等の問いを確認した。そして、この時間の課題を「自分の住むまちを振り返りながら、『住みたいまち』にはどのような条件が必要かを考える」こととした。

次に、生徒が自分の将来とつなげて考えることができるようにするために、「あなたは将来（就職したり家庭をもったりする頃）、島根（または鳥取）に住みたいですか」と問い、生徒に「住みたい」「住みたくない」のどちらかを選択させ、その理由を記述するように指示した。2年生全体の結果は、「住みたい」が62人、「住みたくない」が74人であった。生徒にとっての主な理由は、表2の通りであった。生徒が理由を伝え合う場面では、都会か田舎かという視点のみにならないよう、生徒の答えた理由に対して、教師が「都会、または田舎が住みやすいと思うのはなぜか」「住みやすいとはどういうことなのか」を問い返し、深く考えさせるようにした。活動が進むうちに、学級全体の議論が「島根の良さとは何か」という視点に絞られていった。そして、「一度は県外に出てみたいけど、島根に戻って働きたい」

「自分が家族をもって子育てするなら島根が住みやすい」等、生徒が自分のこととしてとらえ始め、多くの意見が出た(図3)。中には、議論を通して、初めの考えを変える生徒も見られた。

授業の後半では、さらに「住みたいまち」とはどんなまちなのかをイメージするために「住みたいと思うまち」の条件

表2 「あなたは将来（就職したり家庭をもったりする頃）、島根（または鳥取）に住みたいですか。」という問いに対する具体的な理由記述の内容

住 み た い	<ul style="list-style-type: none"> ○人との関わりが深い、空気がきれい。 ○都会より安全で、人が優しいから。島根が将来都会になっていると思うから。環境が良いから。 ○地震が少なく安全だから。空気もきれいだし、食べ物も新鮮でおいしいから。住み慣れているから。 ○自分が生まれ育った地のほうが住み心地がいいと思うから。都会のような慌しいところは落ち着かないと思うから。今のままで充分充実しているから。 ○県外で就職したいけど、家庭をもったり、自分が少し歳をとってから住むのは島根がいい。子どもができれば島根みたいな田舎で暮らすのがよい。 ○自然が豊かでどかな雰囲気があってゆったりするような感じだし、自分が育ってきた地元だから。 ○島根で育ったから、島根で一生過ごしたい。家族がいるから助けたり助けてもらったりできる。
住 み た く な い	<ul style="list-style-type: none"> ○島根の良さもちろんあると思うが、他の地域の良さなども知り、住んでみたいから。都会に住んでみたいから。都会はいろいろおもしろそう。 ○島根にも良いところもあるけれど、これからのグローバル化する社会で生活するために、他の県で生活したい。島根はたまに帰ってきてほっとする場所にしたい。 ○島根では自分のやりたい仕事が思う存分できないと思うから。いろんな事に挑戦したいから。でもいずれは島根へ戻ってきたいと思う。 ○人口も少ないし、楽しいと思えるところもない。就職だったら、絶対都会のほうが良いし、とにかく何でもそろっている。自然よりもにぎやかな方が楽しい。島根とかの田舎にあきたから。自分の尺を広げたい。

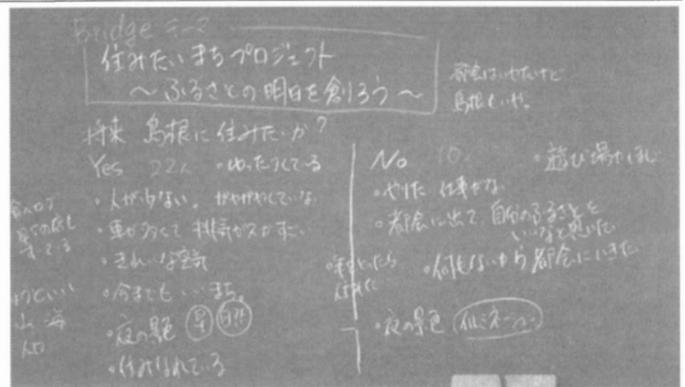


図3 あるクラスの授業の板書

を考えることにした。その際、3つの年代「子ども」「働く世代」「高齢者」で考えることとし、それぞれの年代の住みたいまちの条件を、違う色の付箋に書いた(図4)。その後、前時の岩本氏の講演で「本当に解決しないといけない課題」や「自分たちで解決できるかもしれない課題」について話があったことを振り返った。そして、今の島根の現状を考えながら、記入した付箋紙を3つの視点「今の島根にある」「今の島根にない」「今の島根にないけど自分たちの努力で何とかできそう」で、Yチャートにまとめる時間を設定した。初めは、個人でYチャートにまとめ、その後、班で共有しながら、一つのYチャートにまとめていった(図5)。今の島根の現状や年代別の視点で考える活動を通して、生徒は、多面的な見方・考え方でとらえることができたと感じている。



図4 個人で考える様子



図5 班になり自分の考えを伝える様子

授業の最後には、島根が上位にランクインしている次のような資料を提示した。

- ・10万人あたりの保育所数 全国1位(社会生活統計指数2016 総務省)
- ・平均通勤・通学時間の少なさ 全国3位(平成23年社会生活基本調査(総務省) 等

これらの資料を提示した際、生徒は、世間で話題になっている保育所数の不足の問題も、現在島根においては他県と比べると随分恵まれていることを知り、驚いていた。これらの資料にふれさせることで、生徒が自然豊かで安心・安全な島根の良さも再確認することにつながった。

「住みたいまちを考える」のふりかえりより

- 住みたいまちについていろいろ考えました。Yチャートで班の考えを共有したとき、島根には欠点が多いと思いました。また、年代によって「住みたい」の定義は違ってくると思いました。次に、島根の現状から考えて行つたときに大事だなと思ったのはお年よりの視点でした。子どもにとっての考えは、けっこう自分本位で、本当に大事なことに感じませんでした。いろいろな立場の人の視点に立って考えることは大切だと思いました。
- 島根についていろいろ考えました。犯罪件数や保育園数のランキングも上位に入っていたけど、安全で環境も良いので、とても住みたいまちだと思います。でも、やっぱり島根に住みたいとは思いません。島根では自分のやりたい仕事ができないと思います。だから、私にとって島根は「住みたいまち」でなく、都会で働き帰省したときに「ほっとできるまち、疲れを癒してくれるまち」にしたいと思っています。

【指導上の留意点や地域と連携する際の留意点】

- ・島根に「住みたい」か「住みたくない」のかを学級全体で話し合うことができるように、

「なぜそう思うのか」「似ている意見はないか」「それに反対する意見はないか」など教師が問いかけながらコーディネートした。

- ・前時の岩本氏の講演での話のふりかえりを行うことで、いろいろな視点を用いて考えることの必要性に気付き、ものごとが多面的に考えることができるようにした。
- ・10万人あたりの保育所数などの島根が上位にランクインしている資料を提示することで、「島根の良さ」を数字で確認し、新たな視点で島根について考えることができるようにした。

(4) 講演会「島根で働く人から学ぶ」 講師 5名の保護者の方

(1)～(3)では、資料やしまね教育魅力化特命官岩本氏の講演、「住みたいまち」について考える学習を通して、島根の現状、良さ、課題について考えてきた。本活動では、生徒にとって身近な存在であるお父さんやお母さんの島根に対する思いにふれることで、生徒がさらに課題解決に向けて意欲を高めていくことを期待し、保護者による講演会「島根で働く人から学ぶ」を実施した。5名の方のお話は、以下の通りである。

・麻酔科フリーランス 大野 准子氏

松江で育ち、その後、県外にも住んでおられたお母さん。「いろんな場所に住んでみて、あらためて島根の良さに気付くことができた」「お世話になった地元之恩が返せたら」といった思いや働くことについて語ってくださった。また、女性の立場から、今後女性が子育てをしながら働いていける環境づくりや配慮が大切であることも語ってくださった。島根県を愛する大人の気持ちにもふれ、生徒も嬉しい気持ちになったようである。また「誰もが住みたいまち」をつくるためのヒントや社会との関わり方について知ることができた(図6)。



図6 講演の様子

・株式会社藤忠 藤原 勝氏

県外で生まれ、育ってこられたお父さん。縁あって島根県に来られ、8代目の社長として会社を経営しておられる立場からのお話だった。仕事は、どんな仕事も同じで、働く目的は、生活するため、人生の目的を達成するためであること、お客さんから感謝されたとき達成感がうまれることもお話しくださり、多くの生徒達が、自分もそうありたいという感想をもった。また、今後の地域の発展のためにも、新しいアイデアを取り入れながら進めていこうとしておられる姿から、生徒は大人のパワーを感じ取っていた(図7)。



図7 講演の様子

・株式会社ネットワーク応用通信研究所 井上 浩氏

以前は、県外で働いておられたが、島根県で住んでいきたいという思いから、島根県でRubyに代表されるOSS(オープンソースソフトウェア)を活用して事業を展開する会社を立ち上げられたお父さん。まず、Rubyについてのお話をしてくださった。生徒達は、自分達の身近なところに、たくさんRubyが利用されていること、またそうした会社が島根県に

あり、世界に発信されていることを知り、驚いていた。AIの可能性にふれられながら、一方では、AIはコミュニケーションが不得意であることもお話しされ、今後、生徒達がコミュニケーション能力を高めていくことも大切であることも伝えてくださった（図8）。



図8 講演の様子

・株式会社豊洋 木村 直樹氏

地域の人のための環境の整備や住まいづくりの仕事を通して、地域社会に貢献しておられるようすをお話しいただいた。住環境などに関わる分野で地域に貢献しておられるお話は、生徒達にもイメージしやすかったようである。また、数学を始めとした学校での勉強の意義にもふれながらお話しいただいた。今、中学生が勉強を頑張ることが、将来社会で貢献していくためにも大切なことであることもお話しされた（図9）。



図9 講演の様子

・八雲塗総本舗やまもと 山本 一成氏

歴史を振り返りながら、伝統工芸の成り立ち、伝統を守ることの大切さをお話しいただいた。生徒達も島根県に守るべき伝統があることを改めて感じ、伝えていきたいという思いももったようである。お話の中で、伝統を守り、伝えるということは、携わり続ける人が必要であることはもちろんであるが、地域の人達みんなで守っていくものであることにもふれられた。さらに、新しい分野での八雲塗の技術の活用の可能性についてもお話しされ、時代に応じたあり方を模索することも素敵なことであると感じた生徒も多かった（図10）。



図10 講演の様子

講演「島根で働く人から学ぶ」のふりかえりより

○お話しされた5人の方が、それぞれいろいろな仕事を通して地域にかかわっておられるし、その仕事にやりがいを感じておられることを話を聞いてわかりました。今日あらためて地元で働くっていいなと思いました。さらに島根には、たくさんの会社や病院があるということ、世界に発展していけるような会社が多いということも聞きました。「何もない。やっぱり都会の県庁所在地と比べたら、田舎なんだろうな…」と思っていたから、この話を聞き、島根への見方が変わりました。

○5人の保護者のみなさんは、島根県外に出ておられた時期があり、県外から見ると島根の良さを知ることができるようなので、私も県外に出てみないとわからないことがあるのかなと思いました。島根は、少子高齢化などで、労働力不足が多いこともよくわかりました。住みたい！と思えるまち、住みやすいまちを作れば良いとは思いますが、実行するのは難しいです。そういう壁を乗り越えないと住みたいまちにはならないんだなと思いました。私が社会に貢献することは、まだ難しいけれど、

大人になったら、地域に恩返し（貢献）できるといいなと思いました。それに、島根にはたくさんの伝統文化や自然があるので、そういうのを生かしていけるようにしていきたいです。それと、地元で働くのは、特別感があるように感じられました。

○今日の講演を聞いて、社会にはいろいろな職業があり、それぞれに地域に貢献できることが分かりました。そして、みんなで松江を住みたいまちにしておられるんだなと思いました。島根県には、課題がいっぱいあるという話を今までずっと聞いてきたし、今日も課題があることも話されたけど、保護者の方の話には力を感じ、松江市民として、島根県民として誇りをもつことができました。地域のことは、まだまだ知らないことが多いです。もっと調べてみたいです。地域の良さをもっと知ったら、住みたいまちにするためになることが、もっと見つかると思うから、職場体験では、ここで働いて、ここで住んでよかったと思えることなどをたくさん見つけてみたいです。

ふりかえりにもある通り、生徒達は、今回の5名の保護者講師のみなさんの地域愛にふれ、温かい気持ちになったり、本気で島根のために良さを守ろうと行動しておられるようすに力強さを感じたりしていた。講演後、島根県に課題があることに対してマイナスのイメージをもっていた生徒も、実際に身近なところで、島根県の課題と向き合いながら、地域に貢献しておられる姿に、自分もそうありたいが、今何をしたらよいのか、「住みたいまち」をつくるために地域のことをもっと知りたいという思いをもち、今後の学習への意欲につながっていた（図11）。



図11 生徒が質問する様子

【指導上の留意点や地域と連携する際の留意点】

- ・生徒にとって身近な存在である保護者に話を聞くことで、今後の学習への意欲を高められるようにした。
- ・講師の依頼の際に、生徒が多方面からの地域貢献のあり様にふれることができるよう、多様な職種の方に依頼した。
- ・講師の方には、「ご自身のお仕事に就かれたきっかけ」「理由」「仕事の具体的な内容」「仕事をされていて大変なことや嬉しいこと」「中学生に今やっておいてほしいこと」を、また全体を通して、「島根で働く」「地域社会に貢献する」という視点でお話しいただくよう依頼した。
- ・職場体験の事前準備において、本時の内容を想起させることで、学習内容につながりをもたせた。

(1) 体験先の決定

体験先の希望調査を行うにあたり、まず生徒が、自分のまわりにはどのような職業があるのかを考える時間を設定した。この授業で用いた資料は、島根県中学校進路指導研究会が作成している「島根県中学生生活と進路」である。生徒は、様々な職業を出し合う中で、自分達の生活は、たくさんの職業や人に支えられていることに気付いていた。その後、昨年度に行った職業調べを想起しながら、それぞれの職業には、それぞれに適性があることを確認した。そして、今の自分の興味・関心のある職業が何かをじっくり考えた上で、価値の順位付けを行った。その際、自分の良い面を考え、低い項目を明確にし、克服しようと努力する姿勢を大切にしよう伝えた。自分の良さや特性を基に、体験してみたいカテゴリーを選び、選んだ理由や自分の職場体験の目的をエントリーシートに記述した。

授業後、教師がエントリーシートを基に職場先を決定し、後日生徒に発表した。

(2) 実際の生徒の活動の様子と変容

本年度の職場体験先は63ヵ所あり、そこに1～5人ずつが体験に出かけた。以下に、本校の総合的な学習の時間の6つのカテゴリー別に生徒の活動の様子と変容を紹介する。

① 生徒A (カテゴリー：教育・体験先：私立幼稚園)

(i) 体験活動前の生徒の実態

生徒Aは、事前学習で「将来、島根に住みたい」と記述していた。理由は、「島根は都会と比べて不便なことも多いけど、人との関わりを多くもてるから」である。また、この生徒は、自分自身について「新しいことに挑戦しようという気はあっても、失敗したときのことを考えてしまって行動に移せないから、いろいろなことに怖がらずに挑戦できるようになりたい」と考え、職場体験先として「子どもと関われる仕事」や「困っている人を助けられる仕事」を希望した。

(ii) 体験活動中の様子やふりかえり

生徒Aは、事前訪問に向けて「体験先の方に礼儀正しく、打ち合わせをする」という目標を設定した。事前訪問当日は、体験先の園長先生から園の理念や体験内容、注意事項等を丁寧に説明してもらっていた。ふりかえりに「今日の事前訪問では、礼儀やマナー、あいさつをしっかりと行えたのでよかったです。注意点をもう一度自分で確認しておきたいです。次は、体験中にいろいろなことが起こると思うので、その対応の仕方を考えてみたいです。」と書いており、自ら次の目標も設定することができていることが分かる。

体験1日目は、目標を「自分からあいさつ、行動を進んでする」とし、絵本の読み聞かせや園内のトイレ掃除等を行った(図1)。あいさつは進んでできたようだが、

「分からないことばかりで、あまり積極的な行動ができなかったので、明日は自ら行動したい」と振り返っていた。そして、2日目の目標を「園児さんに笑顔で明るく、積極的に接する」と設定していた。また、園児から「ありがとう」と言われたことをきっかけに、



図1 1日目の緊張した様子

園児と接するときの笑顔が増えていったようである。大人がしていた行動を園児達が真似しているということにも気づき、自分と園児との会話、自分の園児の前での行動のすべてが見本になると感じたようだ。最終日の目標を「やるべきことを見つけて進んでやる」とし、指示された仕事だけでなく、自分で何をすれば良いか考えて行動していった。園児に対して笑顔で目線を合わせて話すことを心がけ、「これからの学校生活でも『心配を恐れず積極的に行動』を意識していきたい」と振り返っていた。

(iii) 体験活動を通して考えた「住みたいまち」

生徒Aが感じた「住みたいまち」に関わる課題は以下の3つであった。

○小さい子どもたち同士が関わりをもつ場が減っていること。

○小さい子どもと高齢者が関わりをもつ場がないこと。

○せっかくある島根の自然を使いこなせていないこと。

また、月に一度幼稚園で行われている園庭開放は、園児とその親子の交流の場となっていることを知り、幼稚園が地域のために行っている社会貢献活動の一つであることを新聞にまとめていた。

② 生徒B (カテゴリー：環境 体験先：須山牧場)

(i) 体験活動前の生徒の実態

生徒Bは、事前学習で、「島根では自分のやりたいことができない場合があるだろうから住みたくない。また、ずっと島根に住んでいても、もっと新しい世界を切り開くことは難しいと思う。」と答えている。一方で、「今後島根の良いところを学んでいき、住みたいまちにするためにはどうすれば良いか考えていきたい。もし、自分の気持ちが住みたいと思わなくても島根が良いまちだと思えるようにしたい。」と考えており、島根の良いところを探そうと職場体験に臨んだ。

(ii) 体験活動中の様子やふりかえり

体験1日目は、「さまざまな仕事を知る。」という目標を設定し、須山牧場にいる牛の様子を観察したり、さつまいも畑の草取りや芋掘りを体験したりした。その日のふりかえりには「様々な仕事があることがわかって良かった。」や「草取りや芋掘りが結構大変な仕事だとわかった。」とあり、仕事の大変さを自分の体で体験し、疲れた様子も表現されていた。

2日目は、「仕事がどのようなものなのか実感する。」という目標を立て、バケツ運びや米を自然乾燥させるはで作りを行った(図2)。はで作りから、機械化されていく農業の現状について考える良いきっかけとなったと振り返っていた。体験最終日は、「今回の仕事について自分なりにまとめる」という目標を立て、稲の収穫や牛の搾乳を体験した。とても疲れた



図2 米を自然乾燥させるはで作りの様子

様子で、普段この仕事を少人数で行われていることを知り、牧場の仕事の大変さを改めて実感していた。しかし、大変な仕事の中にも楽しいこともあるのだと分かり、やりがいも感じていた。職場体験全体のふりかえりで、「大変なことやうれしいことも働くことの中にあると知り、自分がどのように考えて働くのが重要だと感じた。」と振り返っていた。

(iii) 体験活動を通して考えた「住みたいまち」

体験先の方へのインタビューの回答に「今の時代は、どこでも住めば都である。」とあった。その回答から、生徒Bは「どの町でも良いところ悪いところがあり、考える人によって、どのまちでも住みたいまちになるのではないだろうか。」と考えていた。そして「これからは、どのような人に向いているまちなのかという視点からも考えていきたい。」とまとめていた。

③ 生徒C（講座：生活・体験先：警察）

(i) 体験活動前の生徒の実態

生徒Cは小学生のころから警察官になりたいと考えている。今までは細かい仕事内容や、警察官がどのようなことを意識して働いているのか等、深く考えたことはなかった。「島根で働くということ」という保護者の講演や岩本氏の講演を聞き、働くことは地域と関わることに繋がっていることに気づいた。警察官の仕事を通し「松江を住みたいまち」にするために何を心がければよいかという思いを抱いて職場体験に臨んだ。

(ii) 体験活動中の様子やふりかえり

職場体験1日目は、幼稚園での交通安全教室と警察音楽隊の国体壮行演奏の2つの仕事を体験した（図3）。警察官は事故や事件が起きてから働くことだけではなく、防犯や啓発のために働くことも大切な仕事であると気づいていた。また、生徒は、初めは警察官に怖い人というイメージをもっていたが、とても優しい人達だったと感想で述べていた。



図3 生徒Cの様子

職場体験2日目は、公民館へ行き、高齢者の方とのレクリエーションを行った。その後、地域の高齢者のお宅を訪問し、犯罪に巻き込まれないよう呼びかける仕事を体験した。午後は鑑識の体験も行った。警察の方が、地域の方と楽しい時間を過ごす中で、犯罪に関する呼びかけもしておられる地道な防犯活動にふれ、生徒は驚いていた。

職場体験中の実際の事件に対する警察の方の冷静な対応にも、生徒は感動したようだ。また、女性警察官と話をしたことが印象に残り、自分も夢に向けて頑張ろうという思いを強くしたと振り返っている。

(iii) 体験活動を通して考えた「住みたいまち」

今回の職場体験を通し、警察官の仕事には事件事故の対応・防犯啓発活動・地域の盛り上げ等があることを知った。どの仕事もきちんと行われることが、「住みたいまち」につながっている。まちの安心と安全を守るために、地域と積極的に関わり、住民の意識を高めることが大切だとまとめていた。

④ 生徒D（講座：観光・体験先：松江皆美館）

(i) 体験活動前の生徒の実態

生徒Dは、「将来島根に住みたいですか」という質問に対して「島根では自分のやりたい仕事が思う存分できないだろうし、いろいろなことに挑戦したいから住みたくない。でも、

いずれは島根に戻ってきたいと思う」と答えていた。職場体験前のアンケートでは、不得意ではあるが挑戦してみたい仕事として、料理やお菓子作りを挙げており、旅館である松江皆美館で職場体験を行うこととした。

(ii) 体験活動中の様子やふりかえり

職場体験先の印象として、きれいで庭が広い、和風で品がある、鯛めしがおいしいというイメージをもっていた。知りたいこととしては、どのくらい前に建てられたものなのか、働いている人は何人なのか、働いていて楽しいことは何かということであった。

体験1日目は、「仕事に慣れる」という目標をもって、宴会場での片付けや皿洗い、食器ふきなどに取り組んだ(図4)。ふりかえりでは、「仕事は、要領よくてきぱきと動くことが大切で、じっとしている暇がなかった。」と記述している。また、お客さんのことを考えると皿洗いでも汚れ一つ残さないようにすることが大切で、責任のある仕事だと感じていた。



図4 皿洗いの様子

体験2日目は、前日の反省から「要領よく仕事をこなす」という目標を立てた。仕事も前日に引き続き皿洗いや食器ふき、新しく弁当を包む仕事を行った。ふりかえりでは、「皿洗いでは、洗っても洗ってもどんどん洗い物がやってくるので弱音を吐いてはいられない。これが仕事をするということだ。」とい記述していた。いかに効率よく動くべきかということをも休む暇もなく常に考えて動いていたので、とても疲れた様子だった。

体験最終日は、前日仕事の量が多くて雑になりがちだったことから「丁寧に作業する」という目標を立てた。仕事内容も引き続き、宴会場での片付けや皿洗い、食器ふきであった。いつもよりも洗い物の量が多く、心が折れそうになりながらも責任感をもって丁寧にしっかりと仕事に取り組んでいた。昼は、鯛めしを食べさせていただけることになっていたのも、それを楽しみに一生懸命働いたようである。午後からもそのおかげで仕事を頑張ることができたようであった。ふりかえりにも「働く人たちは、ご褒美があるからこそ仕事を頑張ることができるのではないだろうか。そのご褒美とはその人によって違い、給料であったり、お客さんの笑顔であったり。自分はそれが鯛めしであった。」と記述していた。

(iii) 体験活動を通して考えた「住みたいまち」

職場体験後のふりかえりの中で、住みたいまちとは「笑顔あふれるまち」とあった。職場の方へのインタビューで、仕事をする上で大切にしていることは何かという質問に対し「笑顔・元気・健康」と回答された。そこから、今の島根は決して発展した県とは言えず、大きい建物や利便性の高い交通網があるわけではないが、本当に大切なものは「人」だと感じたようである。一人一人が「笑顔・元気・健康」を大切にすると、島根は住みたいと思えるまちになると考えていた。

⑤ 生徒E (講座：福祉・体験先：松江赤十字病院)

(i) 体験活動前の生徒の実態

生徒Eは自分の特徴を「物静かで落ち着いているが自己主張が弱い」と分析した。将来は

医療関係の仕事につきたいと考えている。今回の職場体験では医療の現場を見られることをとても楽しみにしていた。また、職場の方の仕事に対する思いを聞いてみたいという思いももっていた。

(ii) 体験活動中の様子やふりかえり

3日間で次のような活動を体験した。病院内の見学・ドクターヘリの視察・総合診療科の見学とインタビュー・看護科の見学とインタビュー・薬剤科の見学とインタビュー・教育研修での体験とインタビュー・手術室透析室の見学と工学士へのインタビューである(図5)。病院は思っていた以上に広く、機械もたくさんあり、働いている人もたくさんおられた。インタビューを通し、一人一人の責任が重く、スタッフも健康でないといけないことを感じた。また、一人の患者さんのためにたくさんのスタッフが関わっていることにも気づき、チームワークの大切さも学んだ。



図5 生徒Eの様子

(iii) 体験活動を通して考えた「住みたいまち」

生徒Eはふりかえりに次のようなことを書いていた。「この病院は地域の救急医療や総合病院としてドクターヘリを導入したり、地域の開業医と連携をしたりしている。また、災害処置病院という役も担っている。高度の医療が提供されていることが地域の人にとって『住みたいまち』につながっている。しかし、設備等は充実していても看護師不足も現実にはあると聞いた。これから僕たちのような若い人たちが医療に興味をもって力を注ぐことで、住みたいまちにしていけると感じた。」

⑥ 生徒F (講座：ものづくり・体験先：ローズ)

(i) 体験活動前の生徒の実態

生徒Fは10年後、いろいろなものがあり働きたい職場もある都会に住みたいと考えている。しかし、年齢を重ねたのち、島根に住んでみたいと考えている。また、現在でも島根はいいところなので多くの人がIターンやUターンをしてくれるといいなあとも思っている。将来は食関係の仕事につきたいと思っており、今回パン屋への職場体験を希望した。

(ii) 体験活動中の様子やふりかえり

興味のあるパン屋での体験ということでワクワクして臨んだが、まず仕事について次のように感じていた。「パンに囲まれて幸せそうだという思いでスタートしたが、とても大変な仕事だと感じました。5時から仕事が始まり、開店も朝早いけど皆さんつらそうな感じはなく笑顔でおられるのがすごいなあと思いました。」「与えられたことをただするのではなく、一つ一つのことを丁寧にまじめにすることの大切さを学びました。」そして、このお店の心遣いにも気づき「焼きたてのパンがならんでいるし、時間によって商品や値段が変わっていて、お客さんのことがよく考えられていました。」と振り返っていた(図6)。



図6 生徒Fの様子

(iii) 体験活動を通して考えた「住みたいまち」

体験活動後、「ローズのように地元で愛される店にするにはどうしたらよいか考えたい。」と振り返り、来年の社会参画活動についても「地元の人を考えた活動を行いたい。」と書いている。体験前は都会に目が向いていたが、この体験を通して地元へも意識が向くようになり、さらに来年の活動への意欲ももつことができた。

(1) 発表会

＜発表会の流れ＞

①全体会 (14:00～14:30)

内容：2年生の総合的な学習の時間の説明，職場体験の概要

会場：体育館

②対面発表会 (14:40～15:50)

内容：グループに分かれての活動報告

会場：2・3年各教室，特別教室，体育館

発表会は，上記のように二部構成で行った。①②ともに保護者並びに職場体験先に案内を出し，参会を呼びかけた。①では，2年生の取組の大枠を伝えることを目的とし，代表者による全体発表を行った。②では，2年生全員が20グループに分かれ，各会場にて職場体験の報告を一人ずつ行った。1年生は次年度の取組への見通しをもつこと，2年生はお互いの活動を知ることが目的とした。また，職場体験を通して感じた「住みたいまち」についての考えを共有する場とした。

(i) ①全体会

全体会では，進行やパソコン操作等の運営を生徒が行った。生徒代表挨拶，2年生の総合的な学習についての流れの説明，体験後のアンケート結果の報告，対面発表会についての説明の順に進めた(図1)。代表生徒は，プレゼンソフトを使ってクイズを取り入れたり，聞き手にインタビューをしたりする等，聴衆を巻き込んだ発表を行うことができた。

体験後のアンケート結果の報告を行う場面では，職場体験後の生徒と職場体験先の方を対象とした2つのアンケートから質問事項をいくつか選び，結果を紹介した。

生徒を対象としたアンケートのうち「職場体験から学んだことはありますか」という質問に対する回答は，「ある」が85.5%，「どちらかというところある」が14.5%だった。生徒全員が肯定的な回答をした。また「職場体験を通して『住みたいまち』について考えることができましたか」という質問に対する回答は，「できた」が53.6%，「どちらかというところできた」が39.1%，「あまりできなかった」が6.5%，「できなかった」が0.01%であった。多くの生徒が肯定的な回答をした。肯定的に回答した生徒の理由に「お客さんに安全で，安心してもらえるような工夫がたくさんしてあり，そんな店があるまち住めている自分は幸せだと思った」「働いている人達のふるさとに対する思いが熱かった」等の記述がみられた。この



図1 全体会の様子

ような記述がみられたのは、生徒が「住みたいまち」とは何か、「住みたいまち」にするためにはどうしたらよいかといった課題を明確にもち、職場体験を行ったためであると考えている。

職場体験先の方を対象としたアンケートは、63の事業所のうち、49の事業所から回答をいただいた。「生徒の取組はいかがでしたか」という質問に対する回答は「やる気を感じた」が63.2%、「まあまあやる気を感じた」が30.6%、「あまりやる気を感じなかった」が6.2%であった。また記述欄には、「自分から仕事を求め、一生懸命取り組んでいた」「『住みたいまち』に関するインタビューから、目的をもって職場体験をやっていると感じた」という「住みたいまちプロジェクト」に対する肯定的な意見があった。その反面、「職業に対する興味を示していなかった。将来の夢とリンクしている生徒を希望したい」という意見もあった。

(ii) ②対面発表会

対面発表は、14人1組（2年7人1年7人）の20グループが11会場に分かれて行った。発表時間は1人7分とし、説明や質問、感想などの進行も発表者が行った。発表資料は、八切画用紙2枚（両面使用可）を自由に使って良いこととした。画用紙には、伝えたいことの見出しを書いたり、付箋を使ってめくりフリップにしたりと、事前の発表レクチャーでの学びを生かして作成していた（図2）。また、作成したA2の新聞や自分のポートフォリオ等も使いながら発表する生徒もいた。発表者と聞き手の距離が近い少人数での対面発表のメリットを生かし、発表者は聞き手に語りかけるように伝えたり、実演を交えながら発表したりすることができた。また、聞き手からも質問や感想がたくさんあった（図3）。質問の内容も、具体的でとてもよかった。

2年生は、発表の相互評価を行った。生徒に「良かったところや今後の発表に向けて改善点を伝えてあげよう」という目標を提示し、発表者の体の向きや姿勢、声の大きさ、アイコンタクト、聞き手を巻き込む工夫、伝えたい結論が明確かの5つの項目を4段階で評価し、感想も記述するように指示した。

1年生は、発表者が職場体験を通して考えた「住みたいまち」や職場体験で感じたことや学んだことは何かという視点で発表を聞き、コメントを記述した。

2年生の相互評価はA5サイズ用の紙、1年生のコメントは付箋に記入し、発表会后、発表者に渡した。2年生のふりかえりには「1年生からもらった付箋を見て、伝えたいことがきちんと伝えわっていたということが分かってうれしかった。今度は、相手の目を見て発表できるようにしたい」とあった。このふりかえりから、相互評価やコメントを本人に返すことで、自分の発表を客観的に振り返り、発表技能の向上や達成感につながると感じた。

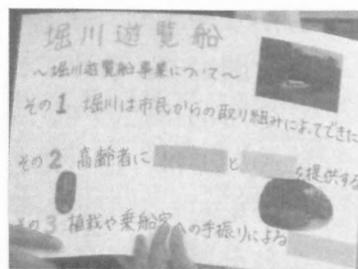


図2 作成した資料

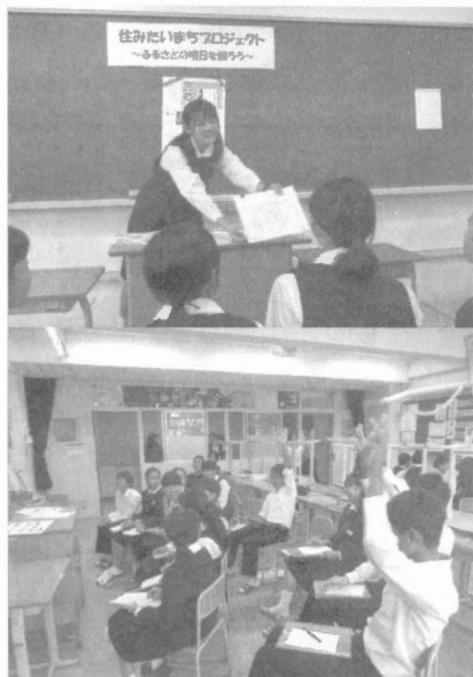


図3 対面発表の様子

2年生のふりかえりより

- 今回の発表のためにプレゼンのレクチャーを受けたので、発表グッズを作り、聞いている人に分かりやすくするための工夫をしたけど、それはすごく難しかったです。たった2枚の画用紙に自分の言いたいことを短く、分かりやすくっていうのがどうすればよいかすごく悩みました。でも、本番で1年生が真剣に聞いてくれて、質問とかにも答えてくれてうれしかったです。今度はもっといい発表ができるようにしたいです。
- 今日の発表では、特に「1年生に伝えよう」という意識をもって取り組みました。1年生も真剣に聞いてくれたので、とても話しやすかったです。少し緊張しましたが、分かりやすく、詳しく発表することができました。また、他の体験先に行った人の発表を聞いて、改めて仕事の大変さを感じました。発表の仕方も、私にはない工夫がたくさんあったので、来年の参考にしたいです。今回のテーマである「住みたいまち」については、さらに色々な視点から考えることができました。他の人の考える「住みたいまち」の視点も関連付けながら、理想のまちに近づけるために、私たちのできることを、これから考えていきたいです。

1年生のふりかえりより

- いろいろな「住みたいまち」の中で、「安心して子どもが預けられるまち」というのがありました。島根は保育園数は他県より多いです。でも、安心してというのはどこの県でも課題だと思いました。「自然を活用したまち」というのもありました。私はすごく共感して、豊かなものを活かすことができれば、もっと楽しい島根になると思いました。新聞のまとめ方もさすがだと思いました。
- 2年生の考える「住みたいまち」は実際に働き、その上で考えたものなので、1年生のもの比べると、より現実味を帯びているなどと思いました。2年生の意見を取り入れて自分たちがもっている「課題の解決策」についての意見をより発展させ、しっかりとしたものになりたいです。また、自分がどう動いたら住みたいと思えるようなまちになるか考えて行動したいです。

【指導上の留意点や地域と連携する際の留意点】

- ・発表会に保護者並びに職場体験先に案内を出し、参会を呼びかけることで、生徒たちが学んだことを地域の人に知ってもらい、一緒に「住みたいまち」について考えていく場とした。
- ・2年生の発表会に1年生が参加することで、来年への見通しをもてるようにした。

(1) 松江地域おこし協力隊の方とのワークショップ

7人の松江地域おこし協力隊の方によるワークショップを実施した。このワークショップは、県外出身、Uターンの協力隊の方から、県外から見た島根の現状や課題、良さについての話を聞き、「住みたいまち」について改めて考えることを目的とした。ワークショップは、生徒が講師の方に質問をし、答えていただく形で進めた。主に生徒は、協力隊の方が松江で地域活性化のために行っておられる活動について質問をしていた。

講師の方とお話の内容は以下の通りである。

・小見波 泰秀氏（横浜からのIターン）

現在の取り組み：来待石プロジェクト、写真展企画、松江を輸出する商社プロジェクト
○主に来待石プロジェクトの話をしていただいた。来待石は、江戸時代に松江藩の経済を支えていたものであったが、現在は衰退しており、需要も減ってきている。将来的に来待石を全く違う製品として売っていかうという取組についてお話していただいた。

・近藤 朝子氏（東京からのIターン）

現在の取り組み：東出雲・八雲の体験型ツアーの企画、人を通じて地域の魅力を発掘し、知ってもらおう聞き書き企画
○主に東出雲・八雲の体験型ツアーの企画について話をいただいた。神話をどんどん発信していき、人と人が交流できるツアーを企画しておられる。1回で終わってしまうのではなく、あの人にまた会いたいと思ってまた参加してもらえるよう、人の縁を大切にしておられるという話をいただいた。

・高橋 翔太郎氏（東京からのUターン）

現在の取り組み：商店街の活性化事業、空き家・空き店舗活用、水燈路夜光茶会主催、玉造温泉アンテナショップ設計担当
○主に玉造温泉アンテナショップについての話をいただいた。生産者や加工会社、販売する人すべてが思いをもって連携することの大切さを話していただいた。また、「やろうと思ったらできる」をモットーに日々取り組んでおられ、何事も挑戦することが大事だと伝えていただいた。

・松本 脇一氏（東京からのUターン）

現在の取り組み：大根島ゆるっとプロジェクト、大根島サイクリング、空き家再利用(カフェ・民家)、農業収穫体験、マリン展開、島根半島海岸リゾート化、インバウンド客に向けたPR
○島根半島海岸リゾート化についての話をいただいた。島根半島は景色がよく、松江に船で遊べる所を作りたいという思いから、リゾート化を計画しておられるという話をいただいた。歴史の遺産や風土記には競争力があり、くにびきジオパークを作りたいという夢も話していただいた。

・森脇 香奈江氏（広島からのUターン）

現在の取り組み：玉造温泉アンテナショップ担当，商品企画，マルシェ出店運営

- 双子の子どもがいることから，教育についてと商品企画についての話を主にしていただいた。子どもを育てる環境として，保育所の受け入れが都会と違って多くあり，病院も近くに多くあって良い。今は，商品企画で「しじみのだしパック」を開発中。日々忙しい人のために，簡単で健康に良いものを作ろうと努力しておられる話をさせていただいた。

・佐藤 朋也氏（東京からのIターン）

現在の取り組み：玉造温泉アンテナショップ担当，商品企画，マルシェ出店運営，
しじみ粥考案

- 修学旅行で来た島根が印象に残っていたので，島根にIターンをすることにしたと話された。島根に住んだ方が自分の人生がおもしろくなるという思いで，松江の活性化のために働いておられる。島根の課題は，恥ずかしがり屋が多く，アピールが足りないことであると感じ，今あるもので松江をアピールすることを考えているとお話いただいた。

・豊田 美智子氏（大阪からのIターン）

現在の取り組み：東出雲・八雲の体験型ツアーの企画，大根島マップのデザイン，
来待石プロジェクト，写真展企画

- 島根を中心に全国へ発信したいことは，茶道の文化や神社についてであることを話していただいた。島根に足りないことは，アピールが足りないこと。せっかくよいものがあったても，知られていなければ意味がない。もっと積極的に全国に発信すべきと伝えていただいた。

講演会の感想より

- 今日のワークショップを通して印象に残ったことは、「人と人とのつながりの大切さ」です。誰か一人とつながれば，また一人二人とだんだん輪が広がっていき，いろんな人とつながればまた戻ってこようとか，また行ってみたいと感じてもらえると思いました。
- 今回，話を聞いて松江にはまだまだ良いものがたくさんあると思いました。そして，それらをどこまで活用できるかが重要なことだと感じました。また，それを思いつき実際に行動しておられる地域おこし協力隊の方々は，すごいと思いました。これから地域が活性化するためには，地域の人が一緒になって行動することが大切だと思いました。
- 次の社会参画活動では，人とのつながりや縁，島根の自分たちが気づいていない島根の良さをPRできるようにしたいと思いました。今回のお話で，他県の人にも島根にはこのような良さがあるということを知ってもらおうべきということがわかり，自分たちの視野が広がって良かったです。
- 私が一番印象に残った言葉は，「島根県は取り残されているのではなく，取って残している」という言葉です。島根には日本の古くからの文化も数多く残っているので，歴史的建築物や文化についてまとめた観光マップを作ったり，パンフレットにしたりして，島根をPRする活動をしていきたいと思いました。

ワークショップを通して、生徒は県外の方から見た島根の魅力や、一度県外に出たからこそわかる島根の良さなどを知ることができた。ふりかえりの中にも、「自分には気づかなかった松江の魅力を多く知ることができてよかった」「県外の方が見ると、松江には意外に多くの魅力があると聞いて驚いた」とある。また、具体的に松江を活性化させる方法を聞き、次年度の社会参画活動に向けてのイメージや意欲を高めることができた。

【指導上の留意点や地域と連携する際の留意点】

- ・いろいろな角度から島根・松江について考えることができるように、IターンやUターンをされた方々のお話を聞けるようにした。
- ・県外からのIターンやUターンされた理由を聞いたり、現在の活動の話を知ったりすることで、新しい島根の見方や魅力を知り、今後の活動の意欲を高められるようにする。

(2) 「住みたいまち」について考える②

これまでの学習のまとめとして、職場体験学習等を通して各自がとらえた地域の現状や課題を共有する授業を行った。「BridgeⅡを振り返り、『住みたいまち』とはどんなまちかを考え、6つのカテゴリー（環境、生活、観光、教育、福祉、ものづくり）に分類・整理する」ことを本時の目標とした。授業の最後には「住みたいまち」にするために、まちや人のために今の自分たちにできることは何かを考え、BridgeⅢへの展望をもてるようにした。

初めに、自分のポートフォリオを見ながら今年度の活動を振り返った（図1）。まず、職場体験学習等を通して「住みたいまち」とはどのようなまちであると考えてきたかを個人で付箋に書き出した。その際、「誰にとっての住みたいまちなのか」と問いかけることで、知らない誰かのための住みたいまちではなく、自分と関わりのある近しい人のための住みたいまちの姿がイメージできるようにした。

次に、個人で書いた付箋をもとに、KJ法を用いて班で考えを伝え合った（図2）。生徒は「スーパーで、地元の食材をいかした総菜などが売られているのを見て、安心でおいしい食べ物があるところは住みたくなると思った」「幼稚園の先生にインタビューして、子どもとお年寄りの交流の場がもっと必要だと思った」などと言いながら付箋を貼っていった。自分の体験をもとに考える住みたいまちは「住みたいまちについて考える①」で考えたときの、住みたいまちの条件に比べ、具体的な内容が多くなった。

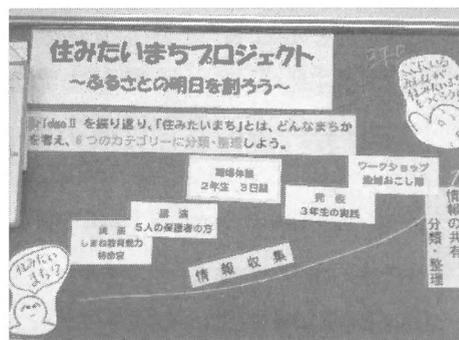


図1 これまでの活動を振り返る



図2 班で「住みたいまち」についての考えを伝え合う様子

さらに、付箋を6つのカテゴリーに分類・整理する活動を行った（図3）。くらげチャートを思考ツールとして使い、班で分類・整理した。班によって、2～3つのカテゴリーに付箋が集中したり、1つの付箋が複数のカテゴリーにまたがったりする様子が見られた。それにより、自分たちが住みたいまちはどのようなまちなのかイメージを共有したり、住みたいまちにするには、複数のカテゴリーで連携して関わっていくことが必要になることに気付いたりすることができた。

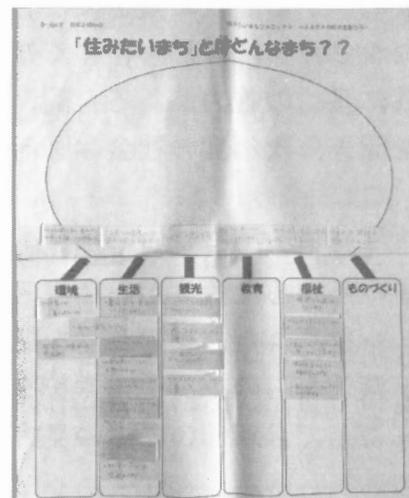


図3 くらげチャートを用いて6つのカテゴリーに分類する

その後、班同士の意見を交流するために、班のメンバーがそれぞれ別の班に行き発表を聞いた。その際、班のメンバーのうち一人が自分の班に残り、他の班の人に説明をする役割を担った。生徒は、自分の班と同じ内容の「住みたいまち」を別のカテゴリーに分類している班に、その意図を聞き、自分達の「住みたいまち」に対する見方・考え方をさらに広げていく様子が見られた。授業の終末では、来年度どのカテゴリーで活動したいか、さらには具体的にどのような内容の活動をしたいかを発言できる生徒もおり、BridgeⅢにつながる授業となった。

「住みたいまちについて考える②」授業のふりかえりより

- 6つのカテゴリーに分類することで、分かりやすく考えることができました。他の人の意見は自分と違った視点から考えていて、それを聞いて住みたいまちについて詳しく考えることができました。
- 自分の班の意見と他の班の意見を比較してみて、どちらにも生活カテゴリーに「安全なまち」があったので、様々な方向から島根の安全を見つめ、それに関する活動をしたいです。
- 住みたいまちについて考えてみると、自分の付箋は7枚中5枚が観光のカテゴリーだったので、来年は観光について活動したいです。
- 色々な分野に解決したいことが多すぎて、どの活動をしようか迷いますが、自分の知識を生かすことができる教育の分野で活動したいです。とにかく話を聞くことが大切だと思うので、第一線で働いておられる方のお話を聞きたいです。

【指導上の留意点や地域と連携する際の留意点】

- ・住みたいまちについて考える際、職場体験学習など今年度の活動を通してどう考えたかという視点を与えることで、学習を振り返って具体的に考えられるようにした。
- ・6つのカテゴリーに分類する際、複数のカテゴリーにまたがる「住みたいまち」があることによって、来年度の活動で各講座の連携が必要になっていくことに気付けるようにした。